感動、感銘を与える由井大会長の講演に聞き入る参加者

4めんよりつづき

農代表・農民）、小名木善行（日本の心を伝える会代表、国史研究会代表）、岩元睦夫（農学博士、元農林水産省農林水産技術会議 事務局長）、成瀬一夫（元氣農業開発機構幹事長）、小谷宗司（薬剤師自然科学研究所理事）各氏が壇上にあがり行われた。

パネラーの発言

パネラーの小名木氏は先ほどの由井大会長の発表で、戦争は食べ物がない時に起こると語られましたが、19世紀のイギリスの経済学者トマス・ロバート・マルサスも著書の『人口論』で、同じ説を唱えている。『人口論』は第二次世界大戦が起こる150年も前に、この本は書かれた。現在の人口は70億。ここまで爆発的に人口が増えたのは、小麦の生産高が激増したため。日本で品種改良された小麦農林10号が、世界の小麦の生産を激増させることになった。

昼食はレトルトカレー

成瀬幹事長

次にNPO法人元氣農業開発機構の成瀬一夫幹事長は、現在、アトピーや花粉症などのアレルギーがどんどん増えている。これは汚れた水や土からできた作物を食べているためだ。癌患者の方が抗がん剤を打つと白血球が減るので、無農薬のトマトや野菜をジュースにして飲んで白血球を増やしている。途中で牛肉を食べたら一挙に白血球が減ったとも語っている。免疫力を向上させることが重要であり、今後は医者と農業の連携が重要になってくるものと思っている。

ブログ「ねずさんのひとりごと」、月に百万人の人が見ていると言う小名木さん

言葉を正確に理解

岩元氏は有機農業に対する関心が皆さん高いが、脱原発や有機農業に人に対して「科学的ではない」と批判する人がいる。西洋で科学が誕生した時は、哲学があった。しかし、今は技術だけである。明治時代、西周は、scienceの訳語に「科学（細かく分ける）」を充てたが、本来は「百科学（何でもあり）」と訳していた。今の科学は細かく分けるだけである。本来の農業は、こうした技術やシステムといった科学的な思考だけでは不十分であると思う。

安心は個人の心

安全は科学的に分析できるが、安心は個人の心の問題なので科学だけでは測れない。感性は、西洋とアジアでは違う。一見、同じことを意味する言葉でも、含まれているニュアンスが異なる場合がある。言葉を正確に理解しなければならない。「おもてなし」は、英語には翻訳できない。「おもてなし」など、英語に翻訳できない言葉だからと言って、ないがしろにしたり無視したりするのはおかしい。

有機的（organic）には、「biological（生物的）」という意味も含まれている。有機農業は、化学肥料を使わないというだけではなく、きれいな水や土、太陽や微生物を大切にするという意味まで含めて考えた方が良いのではないだろうか。

小谷氏、コメント

最後に小谷氏は、私は薬草の生産や伝承事業の保存、環境問題などに取り組むNPOで活動している。由井大会長が最後に「日本の農業はこれからどうなるのか」ということを仰っていたが、私も明日の発表でそのことを取り上げていきたい。これからの農業は、是非、薬草の栽培も重要だということも加えていただきたい。40～50年前は、土地は何にも代えがたい資産だったという意識があった。しかし、こうした意識で今の農地を見ると、休耕地が多く、耐えがたい状況だ。こうした土地を、本来の日本人の先祖が大切にしてきた農村に戻したいというのが私のほんとうの願い。一人ではできることが限られるので、薬草の栽培の重要性をいろいろなところで広める活動をしている。

安心・安全な農産物、食の重要性のシンポジウムらしく女性が目立った

大半は中国から

植物性生薬の大半は、外国（中国）からの輸入に依存しているのが現状。これはとても危険な状態だ。依存度を低くするために、ようやく国も国内生産量を上げる取り組みを始めている。これらのことについて、明日、解説していきたい。レメディーにも、生薬を使ったレメディーをいずれ作って欲しい。

坂本氏、あいさつ

その後、主催者のNPO法人元氣農業開発機構の坂本幸資副理事長が「今日は、共催させていただき、ありがとうございました。長時間にわたるシンポジウムを大変楽しみにしていました。映像を見るととても迫力があり、農業の最前線で、地道に作物を作っておられるのを見て、心を打たれました。明日もぜひ、勉強させていただきたいです。今まで、様々な農業現場を視察してきたが、「何か違う」と感じる現場もありました。しかし、日本豊受自然農の農場は、ふるさとに接したような印象を覚えました。日本豊受自然農の函南農場は、見学しましたが、今度はぜひ、洞爺農場も見学したいと思っています」と挨拶した。

由井会長、総評

最後に由井寅子大会長が初日の総評を「これで1日目を終わります。発表者の方々には、本音で語ってくださって感謝です。日本は、工業が発達し、貯金もたくさん増えましたが、皆さん、幸せですか?自然豊かな風景が、いつの間にか失われてしまいました。私たちの心は萎えている。心を取り戻したくて、自然農を始めました。自然は、愛情をかけた分、よく育ちます。サボテンで実験したところ、悪口をかけたサボテンは、腐って枯れてしまい、愛情をかけたサボテンは、よく育ちました。人間の子供もおなじです。人間も作物も、愛情をかければ大きく育つ。そうすれば、もっと良い世界になるのではないでしょうか。地球も同じです。日本に、「徴農制度」があったらいい。18歳か19歳くらいのときに、農業を徹底して1年やる。そうすれば、もっと農業について考えるのでないでしょうか。最後に、今日はずっと座っていたお尻に感謝しよう。ここ以外にも100名の方々が見ている。今回のシンポジウムは、3回目ですが、来年も開催するつもりです。もちろん、明日も。ではさようなら。明日も来てくださいね」と締めくくった。

会場内に展示ブース。自然農の野菜が飛ぶように売れていた

シンポジウム メッセージ

講演する岩元睦夫氏

今週の火曜日、あの日から3回目の3.11を迎えた。改めて犠牲になられた方々へ哀悼の意を表するとともに、被災地の皆様に対して心より激励の言葉を届けたい。

未曽有ではない

ところで、単に大震災といって片付け、一

「農」の役割が浮き彫りに

元農水省農林水産技術会議事務局長 岩元睦夫氏

書によれば、未曾有の原義は未だ起ったことがないこととある。しかし、地震国の我が国では、史実として記録に残された大震災は数

原発事故にしたってスリーマイル島、チェルノブイリの大事故のみならず、中小の事故を含めると、仮に未曾有の意味を滅多に起こ

らず、一部の者が「科学」という言葉の意味を曖昧にしたまま、天災という言葉ですべてをご破算にし、巨大な堤防で津波に抗しようとする発想や地球温暖化対策には原発が科学的にも最適とする発想など、「天災は忘れた頃にやってくる」という先達の教えを引くまでもなく、自然の摂理に背を向ける以外のなにものでもない。そうした発想がどうしてできるのか、今日まで科学・技術に関係してき

た者として理解に苦しむのである。

自然と共生の社会

92年にブラジルのリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議「地球サミット」以降、我が国の環境行政は大きな進展をとげ、さまざまな関連法等が制定された。そのひとつに自然と共生する社会の実現と地球環境の保全を目的とした02年の「自然再生法」があり、また低炭素化社会、自然共生社会の統合的な取組による持続可能な社会の実現を目指すとされた06年の「21世紀環境立国戦略」等がある。

その当時、想像すらしなかった大震災が現実に起きて3年が過ぎた。この機会に「自然との共生」の発想の原点に戻り、庶民的・直感的感覚で震災からの復興の方向性のあるべき姿を考えてみることが重要である。そうすれば、その中で自ずから「農」の役割が浮き彫りになるはずである。

多くあったし、全国各地に過去の大震災にまつわる事跡や故事が残されている。決して未曾有ではない証しである。

らないことと緩めても、それら原発事故はこの半世紀に起きたことであり、未曾有では済まされないことは自明である。にもかかわ